

# 水の週間実行委員会会長賞（優秀賞）

「あの子達を救いたい」

愛知県

豊橋市立本郷中学校

二年

中村

光里

二〇一九年十二月に中国で見つかった新型コロナウイルスは、『大切な人』みんな大事に過ごそうと誓った『小学校生活残り一ヶ月』、人と人とのふれ合いの時間など、私達の大事なものを奪っていった。悲しみや、悔しさ、怒りを感じ、なんとなく世の中が暗くなった気がした。

第一波の緊急事態宣言が発令され、小学校と中学校をまたいだ貴重な学校生活の三カ月間を奪われ、自宅で静かに過ごす事になった。ぼんやりとテレビを眺めていると、衝撃的な光景を目の当たりにした。

私と同じ年の女の子がやせ細った体で、泣きながら、ぐったりしている赤ちゃんを抱っこしている。今も飢えや病気で多くの子供が命を落としている。水がなく何時間もかけて水を汲みに行く子供達の姿。やっと着いた水場は、茶色に濁っている。それを嬉しそうにポリタンクに汲み、また来た道を帰って行く。そんな生活を毎日送っている。当然学校にも通えていない。

近年、世界人口の約五十パーセントが水を得るのに厳しい状態にある。水資源や給水システムが整っていないために、綺麗な水が得られず、健康にも影響を及ぼしてしまうのだ。

一方私達は、蛇口をひねり、毎日何のためらいもなく綺麗な水を飲むことが出来る。あの子達がこれを見たら夢のように思うだろう。

このコロナ自粛期間中を、ただ用意された勉強をするだけではあまりにももったいないと思ったので、『日本の技術で世界を救う』というテーマで自分なりに社会科研究をすることにした。

私の家はトマトを水耕栽培している。この施設溶液栽培の技術ならどんな土地でも野菜を栽培できる。そのためには水が必要だ。ではその水をどうやって確保すれば良いのかと研究が進んでいった。

日本には海水から淡水を作り出す技術、水を安全に各家庭や施設に届ける技術、そして使用した水を安全に自然に戻す下水処理技術などがあ

り、海外でもこの技術が活躍している事を知った。

感染症などを含む病気を減らす衛生面や、農業、工業など、何においても水が必要で、その結果「水」さえ確保出来れば、あの子達を救えるだろうという考えに行き着いた。

『水の惑星』と言われる地球だが、私達の生活のために取水できる水の量は、地球に存在する水のおよそ0.000000001パーセントしかない。しかも今後の人口増加や気候変動により、世界規模で水不足になることも予想されている。

そんな貴重な水を、日本に住む私達は不自由なく使用できる環境にある。『日本の名水百選』なんていうぜい沢なものまである程、私達は豊富な水に恵まれているのだ。

このコロナ禍で日本が世界に比べて、感染者数を爆発的に増やすこともなく済んでいるのは、日本人の元々持っている綺麗な水によるものかと思う。衛生的な生活を送るには、「水」が欠かせない。手洗いがいい、掃除洗濯、何においても水が必要なのだ。

水を作り、引き、使用後の汚水処理し、また海に戻す。水を安全に循環させる技術を日本は沢山持っている。

あの子達を救えるこの技術を、私達はもっと知っておくべきで、企業レベルではなく国同士の事業として支援していかなければならないと強く思う。

水を当たり前のように使用できる環境に感謝しつつ、自分達さえ良ければそれで良いとせず、『水の惑星』に住む人々が、みんなその恩恵を受けることが出来るような社会を私は作りたい。

あの子達と共に生きていく未来のために、今一度「水」について世界の国々が一緒に考え、行動していけたら良いなと思う。